

白狼は深紅の夢をみる

あずきどろっぷ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ジョースター家につかえる（飼われている）人狼のお話。

次々と訪れる変化にご主人様を守るために人狼ラフィーが奮闘する話。

目次

Part 1 ファントムブラッド

全ての始まり | 1

出会い | 4

侵略者 その1 | 6

侵略者 その1 反撃の時(前編)

9

侵略者 その1 反撃の時(後編)

13

侵略者 その2 | 17

第7話 | 20

part1 ファントムブラッド

全ての始まり

「……ラファイー!!……ダニー!!」 ああ、ご主人様の呼ぶ声がする。私は立ち上がりご主人様、そうジョナサン・ジョースター、(皆はジョジョって読んで)の元へと駆け寄る。ああ、なんて幸せなのだろうか。ご主人様が手を広げ、私を迎え入れ、その暖かいてで撫でてくれる。

そう、私ラファイーはジョースター家にて飼われている犬…というよりかは人狼なのだが。周りの大人たちは「狼なんじゃないか」とか「処分した方がいい」とか言うがご主人様の父、ジョージ・ジョースターを始め、メイドさんや執事さんたちは犬だと言い張って僕を守ってくれている。そしてダニーは私の親友。犬友なのだ。「よしよし、ラファイーにダニー。明日から新しい家族が来るんだ!名前はデイオっていつて、僕と同年なんだ!」…なんて嬉しそうに話すだろう。それに、同じ年ということは人間の方なのだろう。「……ワフ」私はダニーとアイコンタクトを取り、了承の合図をする。「よしよし!賢いなあ」と言つてご主人様はダニーと私の頭をガシガシと撫で回す。ダニーは嬉しさMAXらしいが……ちよつと痛い。

「これが欲しいかい？」と言ってご主人様が靴を片方だけ脱ぐ。私もダニーも大好きな靴キヤッチ遊びだ！「それっ!!」「ワンワン!!」ああ、ずっとこの時間が続けばいいのに。

それから暫く遊んでいたら、「ジョジョお坊っちゃん！夕御飯にございます！」メイドさんが来た。もう1日が終わってしまった。

その夜、ダニーと「どんな子が来るんだろうね」「ご主人みたいな人がいいな。」と話をした。

次の日、ご主人様は私たちと遊んでいる最中に「待ってて!!」と言い残し何処かへ走って行ってしまった。ご主人様の言い付けを守るのは絶対だけど、何だか嫌な予感があった。ダニーと「ご主人様、追いかける?」「(私もジョジョお坊っちゃんまが心配です)」と話をし、追いかけることにした。

悪い予感的中したようで、女の子の泣き声とご主人様の怒声、そして意地の悪い男の子二人の声が聞こえた。ご主人様の姿がハッキリ見える頃には、私もダニーも目を見開き驚いた。「こいつっ!やっぱりジョースター家の一人息子だ!!」「二度とお高くとまるんじやねえぞ!思いしれ!」と声をあげる男の子にご主人様が痛め付けられていたのだ。ダニーは思わず飛び掛かろうとした。でも「噛み殺したいのは私も同じ。しかもここで介入するのはご主人様の名誉に関わる」「(……わかつたよ)」と宥める。暫くす

ると飽きたのか、男の子2人は去り際に再びご主人様をからかい、何処かへ去っていった。

すると心配になったのか泣いていた女の子がご主人様に声を掛けようとする。しかしご主人様は、「いいからほつといて!!感謝されたくてあいつらに向かつて行つたんじゃないぞツ!」と女の子の手を弾いた。∴照れ隠しかなあ。ご主人様は紳士を目指しているから、と言い捨てこちらに戻ってくる。∴あつ。「こら!ダニー、ラフィー!!待ってて言つただろ!!」やつぱり、怒られた。でも、その勇姿を私らは見届けたよ。そのまま家へ帰ろうとすると、一台の馬車がやってきた。ご主人様の言っていた新しい子だろうか。

出会い

家に帰る途中、馬車がガラガラと音を立てて走って来て、家の前に停まる。「(ご主人様の言つてた新しい子かなあ?)」「(きつとそうでしょうね…楽しみだなあ!!)」「ご主人様はどうやら誰なのか見当も付かずに馬車のすぐ隣に立ち止まり、少し不安げな顔をしている。それから直ぐに馬車からカバンがドサア!と音を立てて放り出された。…投げる必要あるのかな。それに続き、待望の新しい子が降りて来た。シャン…スタツ、グウウン バアーンって感じで。…感じて。それをみていたご主人様が「…誰だろう?」といい放つた。…ご主人様…しかし直ぐに察したようで、ワクワクした様子で「君は、デイオ・ブランドーだね?」と聞く。ブランドーっていうのか。「そういう君はジョナサン・ジョースター」まるで事前に話し合っていたかのような返し。「皆ジョジョって呼んでるよ…これからよろしく」ご主人様が自己紹介を済ませたところでダニーが「(デイオ…デイオのところいきましようよ!!!)」「(そうだね)」と返事をしたときにはダニーは走りだしていて、ワンワン!!と鳴きながらご主人様と、デイオくんの方へ向かつて行つた。「あつ、ダニー! ラフィー! 紹介するよダニーとラフィーってんだ! 2匹とも僕の愛犬でね利巧で賢いんだ! ダニーは獵犬で、ラフィーは狼みたいでカッコイ

いんだ!!心配ないよ!決して人は嘯まないから。すぐに仲良しになれるさツ」と嬉々と私らを紹介するご主人様のよこで「ふん!」とつまらなそうにするデイクくん。犬が嫌いなのかな…:だつたら…:「(ダニー!!)」

嫌な予感がし、私はデイクに飛び掛かろうとするダニーを横から全力疾走し、押し退けた。その瞬間、「グキヤアアアン!!」「(ラフイーッ!!)」デイクくんにか一杯蹴られてしまった。…:そんなに犬が嫌いなのかな。正直いうと、死んでしまうほど痛い。でもダニーを救えたのは良かった。「なつ、なにをするだアー!!許さんツ!!」「(こいつがジョースター家の後継ぎ、ひとり息子のジョジョか!こいつを精神的にとことん追いつめゆくゆくはかわりにこのデイクがジョースター家の財産をのつとつてやる!)」途切れていく意識の中で、そう叫ぶご主人様の声が聞こえた。

目が覚めると私はいつもの犬小屋にいた。私が起きたのに気付いたのかダニーが歩み寄つて来る。「ああ、ラフイー…:大丈夫かい?…:先ほどはすまなかつた…」と謝罪の言葉を述べた。「いや、大丈夫さ。君が蹴られなくて本当に良かった。」私らは軽い会釈をしたあと、ダニーの提案で窓から中の様子を伺う事にした。

侵略者 その1

「~~~~」窓から様子を見守る事になった私らは、黙々と外から中を覗いていた。「(なんか言ってるね。)」(おそろくデイトに邸の皆さんを紹介しているのでしょう)」「(ぬう〜デイトくんめ：愛想のいいふりをしおって〜)」そんな話をしていると、紹介が終わったのか皆バラけて自分の持ち場に戻ってしまった。しかし、一人のメイドさんが来て私らを中へと入れてくれた。「よしよし、良い子ね」と私らを撫でて行ってしまった。ご主人様の方へ目をやると、あまり良い気分ではなさそうで、ひきつった笑顔だった。デイト君は壁にかけてある変な仮面に目をやった後、私らを見て嫌そうな顔をした。そんなに嫌かい：。そしてご主人様がデイト君の荷物を運ぼうと手を伸ばした瞬間!! ガシツとデイトくんがご主人様の手首をつかみ、捻りあげた。「うああ：!! うっ：!!」と驚きと痛みの混ざった声をあげた。コイツウ〜!! 「：ガヴヴヴヴ：」とダニーが唸り声をあげ、忠告したにも関わらずデイトくんは見下した目線を寄越すだけでやめようとはしない。それどころか目の色を変え、「何をしてんだ? ぼくのカバンに気安く触るんじやあないぜ!!」「えっ?」「ご主人様が困惑した声をあげると共に小汚ないだのマヌケだのとご主人様を罵倒する。：はあ。運ぼうとした、というご主人様の言葉をはねのけ、

「結構!!それに君のては犬のヨダレでベトベトだろう!!」荷物は召し使いに運んでもらうと言って、ご主人様の鳩尾に思いつきエルボーをかました。「(ご主人様!!)」「ヴウゥワンツワンワンツ!!」流石に噛みはしませんが、あのダニーが吠えた。「ふん、ギヤアギヤア煩い犬め」とダニーを睨み付ける。：おお、恐い。流石のダニーも怯んでしまつたようで、吠えるのをやめた。その後、ご主人様の耳元でイバるな、僕が一番だ、極めつけに「僕は犬が嫌いだ!!人間にへーこらする態度に虫酸が走るのだ!!あのダニーとラフィーとか言うアホ犬を僕に近づけるんじゃないぞ!!」：：：好き放題言いやがつて：!!私は人間にへーこらするつもりはないと、ディオくんは目を強く睨み付けた。まあ、鼻で笑われただけだったが。そのあとディオくんは父上と呼ばれ、行つてしまった。

そしてこの日を境に、父上はご主人様にとても厳しくなつた。勉強の事はよく分らないが、間違える度に手を鞭のようなもので叩かれたり、ディオくんと比べられたりといったようすで、だ。

食事の時だつて、作法がなつていないと厳しく怒るようになったし、食事に関してはディオくん、そして私らも比較の対象だつた。：まあご主人様の食べ方はお世辞にもきれいとはいえないけど…。

挙げ句の果てには父上が「もう食べんでよいツ!!食事は抜きだ!!自分の部屋に戻りなさい!!親として恥ずかしいツ!!ディオにダニー、ラフィーの食べ方を見習え!!ディオの

作法は完璧だぞ!!」と。ご主人様はそのまま食堂から飛び出してしまったので、私らも追いかけた。途中、マヌケが、と聞こえた気もしたが、気にしなかった。「(……母さん……!!)」「クウーン」「……ワン」ダニーと私が鳴くと、ご主人様は気が付いて、「ダニー、ラフィー……グスン……君達は僕の見方だよね……?それとも僕をからかいに来たのかい?」と落ち込んだ様子で話かけて来た。だから私らはご主人様の顔を舐めた。「(そんなわけないじゃあないですか!!)」「(私らはずっとご主人様の見方さ)」「あははは、くすぐつたいなあ!やめろよ!」と元気を取り戻した様子で安心した。「あはは……あつ、食べ残しのチョコだ!やった!」……そんなに落ち込んでいなくて良かった……。そのあと、私とダニーで邸からクツキーや果物などの食べ物をご主人様に運んだ。「(元気そうでよかったです)」「(ジョジョお坊っちゃんを守らなければ……)」その日はご主人様のベッドで一緒に眠った。「……ふん、くそ犬どもが……」

侵略者 その1 反撃の時（前編）

今日はご主人様はボクシングとやらをするらしい。私らは連れて行ってくれなかったので、ダニーには悪いが私は久しぶりに人間の姿になって付いていこうと思う。あつ、ご主人様が出かけたぞ！「ダニー行つて来る!!」（気を付けて!）」さあ、尾行回収だ！（ちなみに、ダニーは私が人狼だということを知っている。）：ドキドキ。「誰かいるのかい?：もしかしてデイオなのかい?」：（ビクッ）!!ご主人様に見られたらどうか?：「なんだ、勘違いか」どうやらバレずに済んだようだ。ご主人様はそのままボクシング会場とやらに向かつていった。くく中略くく初めてボクシングというものを見るが、すぐく痛そうだというのが感想だ。それに、かなりの熱狂ぶりで皆何かにとり憑かれたように熱中している。

あれにご主人様に参加するのは意外だ：。遠巻きからポツんと一人で観戦していたのだが、ご主人様の番となれば話は別だ。人混みを掻き分けて、もみくちゃにされながらもなんとか最前列に到達。

そして選手の紹介が行われる。「まずは挑戦者、ジョンサン・ジョースターツ!!!彼は最近実力をつけてきましたッ!!」ワアアアアと会場が盛り上がり、なんだか誇らしい気

分になる。「対するはチャンピオン、マーク・ワトキンツ!!」ドワアアアとご主人様に比べて倍くらいのお歓声がある。…グギギ…。

しかし、なにやら様子がおかしく、いつまで経ってもチャンピオンがリングに入らない。だんだんと野次を飛ばす連中が増えていくなかでレフェリーの男の子がこう叫んだ。「皆さん、お静かにツ!ここにいるチャンピオンからたつた今新しい友人が我々のゲームに参加したいとの申し入れがありました!!我々はその友人の名前と顔は知っています、性格はあまり知りません!!」…ああ、嫌な予感がする。

忠犬の言うことではないが、ここで相手が代われればご主人様はボコボコにやられてしまふだろう、と脳裏によぎった。しかし、そんな考え事はこの言葉を聞いた瞬間にやめさせられることとなった。

「新しい友人…?ハッ、まさか!」「ディオ・ブランドーくんです!!」「…ディツ!?…ツツ」危うくディオくん!?と叫んでしまうところだった、危ない危ない。どうやら観客はご主人様とディオくんが対戦する事に賛成な様子。そしてボクシングは自分に賭けをするらしく、レフェリーの男の子が帽子を差し出した。そしてディオくんは「もちろんいいとも」と快く賭け金を差し出した、のだが「あ、あれは…!!父さんにもらった一ヶ月分の小遣い全部だツ!!」驚くのはその金額。ディオくんはどうやら一ヶ月分のお小遣いを全て賭けたらしい。流石のレフェリーも、「ジョジョ、どうする?この金額でもうけてた

つかい？」と心配してくれている。「(この勝負に負ければ小遣いは全て無くなる…しかし、それはディオとて同じ!!)よし、うけてたとうツ!!」ルールはどうやら顔に一発食らえば負け、10カウント以内に立ち上がれなくても負けらしい。しかし気になるのはディオくんの言葉だ。「ロンドンでやつて知っている」と言っていた。それはつまりボクシング歴は長いということなのだろうか？

そうこうしている内に、試合開始のゴングがなる。観客はそんなよそ者やつちまえ、と盛り上がっている。そしてご主人様の鋭いパンチ!!…は軽々と避けられてしまう。ありやりや…。しかしご主人様は続けてパンチを打ち続けるも、全てあつけなく避けられてしまった。そして反撃だと言わんばかりのディオくんの強烈なパンチが入る。ああつ、「ごしゅ…つ、ジョジョ!!」危ない危ない…。まともにパンチを食らったご主人様は動けなくなる。ああつ、このままじゃ…!!「(まずボデイにパンチを入れてうごけなくする…そこに留目をさすツ!!くらえツゴロツキ共がやる貧民街ブース・ボクシングの技巧をツ!!)」繰り出されたとてもないパンチをご主人様はまともに顔に受けてしまった。ああ、痣ができるだろうな…と思いつつ見ているときに私はしつかりと見てしまった。ディオくんが故意にご主人様の目に親指を入れるのをツ…!!ワアアアアアアアアと会場が盛り上がる。「すごい!!」と口を揃えてディオくんによつて行く。「そんな、酷いツ!!…故意にやっただツ!!」「…ハッ、君、大丈夫かい？」急いでご主人様

に駆け寄り声をかける。「ああ、大丈夫さ……ありがとう」……血が……でも失明はしてなさそうだ。良かった。そして私は……主人様にこう聞いた。「ねえ、グローブ貸してくれないかな？」と。

侵略者 その1 反撃の時（後編）

「…え？何に使うつもりだい？別にいいけど…」グローブを貸してくれないかと聞いた私にご主人様は困惑しながらも了承してくれた。やったね！さあ、グローブをつけて準備万端だと言いたいところだったが、「…これ、むすんでくれないかな…はは」「えっ」久しぶりに人間化したので細かい動きができないのだ。ご主人様は大丈夫かなア…と言いながらも結んでくれた。流石ご主人様!!あとはディオくんに声をかけるだけ、というところでご主人様が「ところで君名前はなんていうんだい？こころ辺では見ない顔だけど…」「…えっ、私はラフツ…ハッ、ア、アルフォンスってんだ。よろしく。」アルフォンス：我ながら今のは上手い誤魔化し方だと思う。「らふ？まあいいや、よろしくアルフォンス」…わりと危なかつた。さて、あまりぐずぐずしているとディオくんが行ってしまうのですぐに話かけ、…すっごい人だから。こちらもなんとかもみくちやにされながらディオくんの元へと辿り着いた。「…ねえ!!ディオツ!!…くんツ!!」人が多すぎた流されないようにするのがやつとで、途切れ途切れの呼び声になってしまったが大丈夫だろうか。「…新入りの僕が言うのもなんだが…君、見ない顔だね？」なんとか気付いて声をかけてくれた。よかった。それと同調して周りの皆も全員私の方を見る。…落ち

着いて。「やあ、はじめまして私はアルフォンスというものだ。私、君とボクシングがしたくてね？デイクくん。」自分ではしつかり言い切れたと思ったのだが、どうやら違ったようで。「声が震えてるぞくへッ!!」「なんだこいつ?」「よわそーッ!!」とバツシングの嵐が起こった。でもデイクくんが「みんな静かに…いいだろう、僕が受けてたとう」と言ったので、全員が再びリングの周りに集まり始め、そんなやつやつちまえッ!!と盛り上がる。この時、ご主人様の顔を見ると不安そうな顔をしていた。もしかして私がデイクくんにもボコボコにされるのを心配しているのだろうか?そんな事を考えていると、「みてたから分かると思うけど、このボクシングは子供の遊びじゃあない。自分に賭けてもらうよ。」ああ、そっか。「…ふん!」デイクくんが再び帽子に賭け金を入れたのだが、どうやら負けるつもりは無いらしい。ご主人様から勝ち取った分も含めて全額を賭けた。「さ、さっきの倍だよ…君、それでも勝負するかい?それにこの金額相応なものは…」レフェリーが何かをいいかけたところで私は袋を取り出す。ご主人様に内緒で今まで働きに出掛けていた分全額だ。まあ、ご主人様やデイクくんは3か月くらい我慢すれば貯まる金額だけど。それを見てレフェリーは帽子を落とし、観客はざわざわした。「ふん…負けるつもりは無い、か。おもしろい。」とデイクくんが呟くと同時に試合開始のゴングが鳴る。負けるわけないだろう!?ご主人様の敵討ちだ…。

「でも、私ボクシングしたことないんだよねえ…」「…貴様なめているのかッ?!」ああ、

怒らせちゃった…。私がいつまで経っても殴りにかからないので、痺れを切らしたデイオくんが攻撃をしかけてくる。ブオンツ!!…ひえエ〜ツ!! あんなの当たったら死んじゃうよう。「すげえツ!!」「あいつ避けたぞツ!!」と観客も盛り上がりつつ。ふふん!! 動体視力、反射神経、スタミナだけは自信があるのだ。とちよつとした優越感に浸っている、デイオくんが殺しにきてるんじゃないかと思う位のパンチを連続で繰り出してくる。まあ、当たらないけど。「すごいよアルフォンスツ!!」「(くそツ!! 何なんだこいつはア〜ツ!!)」「ご主人様…ハツ!!」「うげつ…つっ」ご主人様の声に気をとられてデイオくんの鋭いパンチを食らってしまった。…痛い。しかしこんな事で止まる私じゃないんでねツ!! 次に顔面に飛んでくる拳をかわす。ワアアアアアア!! 会場がドツと盛り上がる。さて、そろそろおしまいだ。渾身のパンチを外して少しだけよろけたデイオくんの顔面に蹴られたお返ししの強烈なパンチを…ツ! ボカツ「…?」パンチ確かに顔面に決まった。しかし、私のパンチ力が無すぎた。デイオくんのは平然と立ったまま困惑している。…それは私も同じだ。「こつ、この勝負顔面へのパンチが決まったため、勝者はアルフォンスウツ!」…ワアアアアアアアツ!! 少しの間があつたが、勝者を称えるように会場が盛り上がり、観客達が私の周りへ集まってきた。「すごい!!」「かつこ良かったぜアルフォンスツ!!」と次々に言葉が飛んでくる。「あつ、ありがとう…?」…とりあえずありがとうと言っておいた。「くそツ!!…あのアルフォンスとかい

うやつめエツ!!」ああつ、デイオくん怒ってるよ…!!とりあえずご主人様の元へ行かなければ…「ごつ、ジョジョ!!ありがとう!!君のグローブがあつたから勝てたんだ!!」「そうかな…?アルフォンスが強いだけさ」また謙遜しちゃって。いや、でもあのパンチは痛かった。もうやりたくない。結局1日ボクシング観戦をご主人様とを楽しんだあと、自分の賭けた額だけ持って帰った。恐らく皆は私のこの姿をしばらく見ないだろうから、注目がデイオくんに向いたままなのは変わりないと思うけど。その後、ご主人様に送っていくよといわれたが、全力で断った。「じゃあね、アルフォンス」「うん、じゃあねジョジョ」自分はこつちだから、と別れるふりをして、狼に戻って先回りするように走って家へ帰る。「はあつ、はあつ、ただいま!!」「(どうだったかい?)」「(…痛かった。)」

そっか、と呟いてダニーは家へ入っていったので、私も後を追いかけた。

侵略者 その2

結局その日はご主人様が帰ってきた後、少し気まずい食事が行われたこと以外は特になにもなく1日を終えた。ご主人様の目もだい良くなつたようで、次の日にはケロツとしていた。そして今ご主人様は探し物を探しているのか、机や箱の物を取り出しては放り出してを繰り返していた。「なあダニーにラフィー、僕の時計を知らないかい？」うーん、知らないなあ：「(ダニー、知ってる?)」「(いや：)」だよ。どちらもと知らなかつたので、「クウーン」と鳴いた。「そうかい：おつかしいなあ！僕の時計どこに置いたんだろう：？」ある場所は見当もつかないので、私らはご主人様が散らかした物をくわえては直し、くわえては直しを繰り返していた。：散らかすのやめてくれないかなあ。「はっ！」とそこへデイオくんが現れた。二人は数秒の間様子进行を伺うように動かさず、怪しい笑みを浮かべるデイオくんの手にはカチツカチツカチツと規則正しい間隔で音をたてるご主人様の懐中時計が握られていた。：盗った？「少しの間この時計貸してくれよな：僕時計を持ってないんでね。おっと！友達に合う時間に遅れる：」と言つてサツと踵を返して行つてしまった。：君時計持ってたじゃあないか：。シヨツクをうけて呆然と立ち尽くすご主人様の顔を元氣付けるように一舐めした後、デイオク

んの後を追いかける。「ふん…なんだアホ犬か、ジョジョはどうした。あいつに貴様らクソ犬を近付けるなど言つたはずだが…」…腹立つなア…「ガヴヴヴ…（それ以上好き勝手いうんじゃあない…）」と警告する。私だけならまだしもダニーとご主人様を貶すのは許さない。「作法もなっていないヤツに犬の躰なんぞ…」もう我慢できない。考えるよりも先に行動に移した。「ワウツ!!ガヴツ…」ディオクンの足に噛みつき、唸り声をあげる。ディオくんは驚き、若干の焦りをみせている。ダニーが噛まなかつたから私も噛まないでも思つたのか?…笑えるなあ。「このクソ犬めツ!!人間に噛み付くとはいい度胸だなツ!!」「ギヤイツ」う、…痛…ディオくんは私を引き剥がそうと頭を何度も足で蹴つてきた。しかしこれで離せばずつとディオくんに低くみられることになるだろう。それだけはゴメンだ。「チツ…!!」「!!」あ、あれはナイフツ!!どこに隠していたんだ:!?私としたことが、ナイフをちらつかされて一瞬噛む力を緩めて、ディオくんを牙から逃れるチャンスを与えてしまい足を離され、そのまま壁に蹴りつけられる。「ギヤツ…グヴヴヴウ…」「ふん、ナイフをみて力を緩めたな?貴様、ナイフを知っているな?」…ツ!!感付かれた…ツ!!出来る限り動揺を面に出さず、ディオくんを睨み付けていると、「ラファイーツ!!ディオツ!!ラファイーに何をしたツ!!」「何をしたもなにもコイツから仕掛けて来たんたぜ…おっと、そういえば友達と約束をしていたんだったな…」…ご主人様アツ!!「ラファイー、大丈夫かい…?」「(ボクシングに比べればましき…は

は」とはいえ頭がクラクラする…。次会うときはどういふ顔をすればいいんだろうか。ちよつと、疲れたから…寝るよ。「ラフィー…くそつデイオーツ!!」結局騒ぎを聞き付けた執事さんが私を手当てしてくれて、そのあとはいつも通りの1日を過ごした。明日はご主人様が大きな木の下まで連れてつてくれるって言つてたなア…楽しみだ。

第7話

今日は、約束通りご主人様が大きな木の下まで連れてきてくれた。もちろんダニーも一緒にだ

ただ、一つ気がかりなのはパイプをふかすのは良くないんじゃないかな…と。

そんなことを思っている内に、むこうの方からドタドタという足音と、楽しそうな声が聞こえてきた。

ダニーもそれを伝えようと、「ワン!!」と鳴いた。そして走ってくる男の子達に気付いたご主人様が、話しかけ、「おーい!!みんな登ってこいよ!隠れてパイプふかさう」と誘う。

最初は友達かなあ?と思ったのだが、どうやら男の子たちはそう思っていないらしい。

すぐさま見下すような表情をした後に、「おい、変なのがなんか言ってるぜ」「向こう行こう、ここで遊ぶのは危ないぜ:チクられるからな」と言って踵を返してしまう。

もちろん、チクリ魔と呼ばれて頭に来ない人はいないだろう。ご主人様も直ぐに木から飛び降り、

「言ってみろ!!誰がチクリだア!!」と男の子の一人に殴りかかった。…直ぐに手を出すのがご主人様の悪い所かなア…。

男の子達も仲間を殴られて黙っているはずもなく、「(あつ!!)」「(ご主人様!!)」後ろから木の棒で殴られてしまい、ご主人様はその場にうづくまつてしまった。

男の子達が「ケツ!チクリ魔のジョジョめツ!!」「こいつと遊ぶとチクられる、と言いつい何処かへ行ってしまったのを見届けた後ご主人様の元へと駆け寄り、顔を舐める。

「(心配しなくても大丈夫。私らはご主人様の味方だ…)」「(ジョジョ坊っちゃん、元気をだしてください)」と。

ほどなくして急に勢い良く起き上がったかとおもえば、「ディオ!!ディオだな!!ディオが彼らに僕の不利なデータラメを吹き込んだのだツ!!なぜかディオは僕を陥れる事ばかりしているツ!!」どどんと侵略される気分だツ!!」と叫んだ。

確かにそれはあるかもしれない。そしてご主人様は、「ディオ!!」と何度も叫びながら走りだし、最終的には川のほとりで寝転がり、そして川を見つめて悲しげな顔で何かを考えていた。

「お前たちだけはディオが何をしたつて僕の友達だよね?」と言つて撫でてくれた。決まつてるじゃあないか、ずっとご主人様の友達さ。

こんなやり取りをしていると、背後でパキツと枝を踏んだような音が鳴り、ご主人様

とダニーが振り返る。

「(あつ)」視線の先にはこの間ご主人様が助けた女の子がいた。見つかつて恥ずかしくなかったのか、女の子はサツと木の枝に籠をかけて走り去ってしまった。

「?誰だ今の女の子…僕をじつとみてた…どこかであつたことのあるよーな気もするけど…」(ダニー…)(ええ、そうでしょうね)」

ご主人様はそう言つて、籠の中身を見に行つて、ハツとした。

「僕のハンカチ!!思ひだした!!人形をとられて泣いていた女の子だ!僕のハンカチを洗つて届けてくれたんだ!!」どうやら思い出したようで、嬉しそうに「ブドウありがとう!うーねーツ明日もここに居るから君もおいでよーオッ!」と言ひ、その場に座つてブドウを食べ始め私らにも分けてくれた。

「黙つてたつたの一言も言わないで女の子つてカワイイな…」と言ひながら。

どうやら恋をしたらしい。うまくいくといいなア、ご主人様。